https://ameblo.jp/motoyamakitamachi/entry-12632402327.html

阪急電車神戸線開通 100 周年の歴史 ～本山地域を含めた沿線への影響～

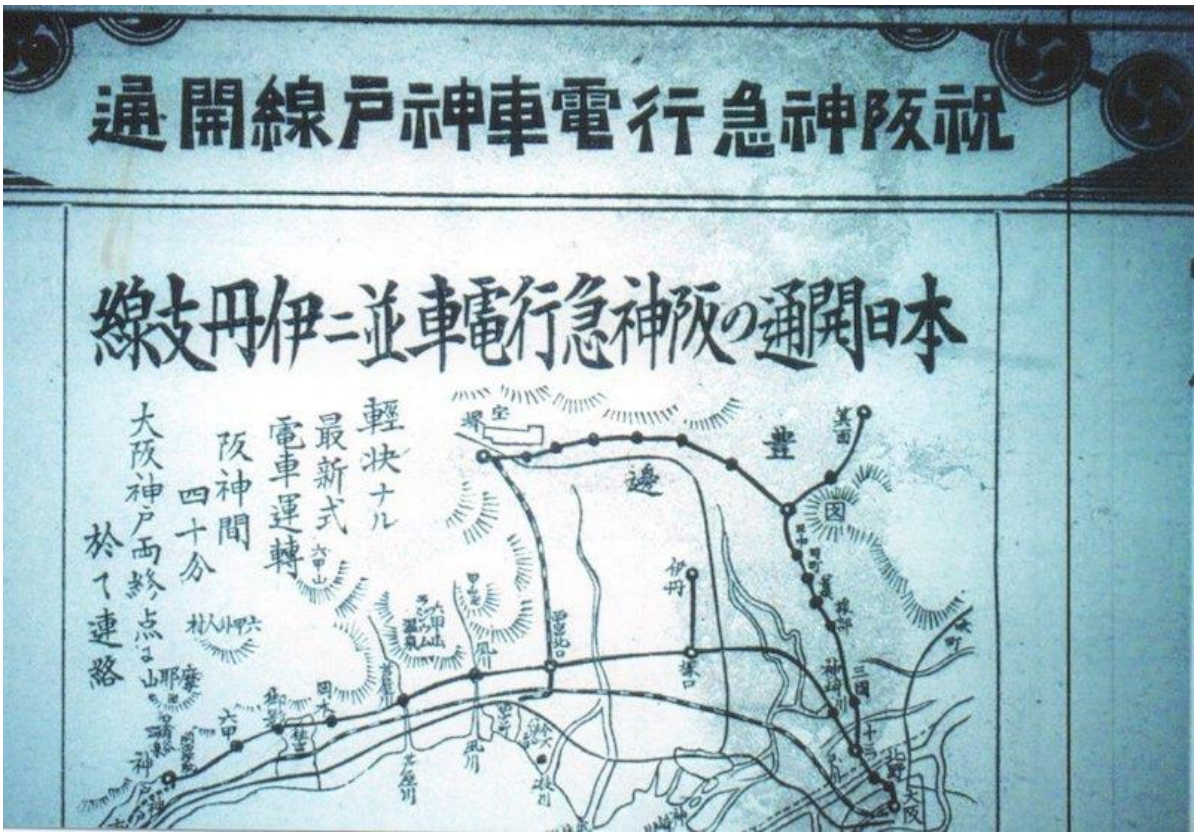
2020 年 10 月 17 日(土)

テーマ:本山北町全部

令和 2 年(2020 年)7 月 16 日に阪急電車神戸線が開通して 100 周年を迎えた。
大正 9 年(1920 年)7 月 16 日に神戸本線の梅田駅～上筒井駅間と伊丹支線の塚口～伊丹間が開通している。
ここに掲げる写真は大正初年の岡本駅付近とされる写真であり、全くの純農村の風景であり、阪急電車開通前の我々が活動する“本山北町まちづくり協議会”の 109 年程前のすぐ近隣の風景である。

(写真①大正初期阪急電車開通前の岡本駅付近から)

“本日開通の阪神急行電車並ニ伊丹支線
軽快ナル最新式電車運転。阪神間四十分
両終点に於て市電に連絡”
(注:旧漢字は筆者二宮が新漢字に変換)
と宣伝をしているのは、開業翌日の大正 9 年 7 月 17 日の神戸新聞(注:二宮撮影の神戸新聞)の祝開通の宣伝広告と阪神急行電車の社告である。



（写真②大正 9 年 7 月 17 日の神戸新聞の広告）

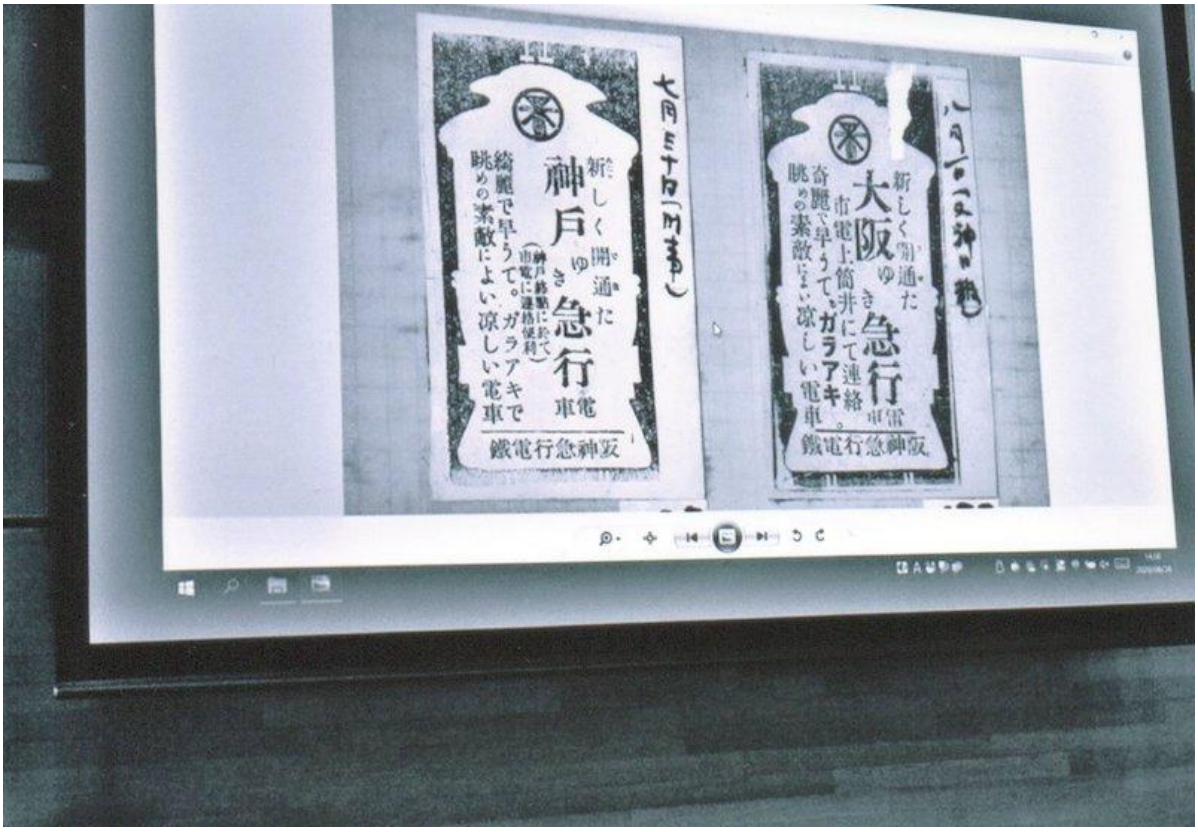
（写真③大正 9 年 7 月 16 日の阪神急行電車社告）

開通時の大正 9 年（1920 年）には現社名の阪急電鉄ではなく、箕面有馬電気軌道から大正 7 年（1918 年）に社名変更をした阪神急行電鉄を名乗っていた。
神戸線開通の前年の大正 8 年（1919 年）には、宝塚少女歌劇団が誕生しており、宝塚歌劇ファンによりつい先頃これも創立 100 周年を祝っている。
大正 10 年（1921 年）には西宮北口と宝塚間（西宝線）も営業開始をしている。
神戸線が開通をした大正 9 年は阪急電鉄（現社名）創業者小林一三が 47 歳の時である。

（写真④阪急電鉄創業者小林一三）

ちなみに小林一三は昭和 32 年（1957 年）に 84 歳で阪急沿線池田の自邸で没している。多業種に手腕をふるった小林一三であるが、今回のブログは神戸線開通 100 周年と沿線の関係などについて論をすすめてみたい。
神戸線開通 100 周年については、筆者二宮を含めた旅行評論家、交通ジャーナリスト、鉄道ファンなどが、種々の催しを開いたが、いかんせん新型コロナウイルスの蔓延によって、規模を縮小した小規模な催事しか出来なかった。
さて、神戸線開通時のキャッチコピー（キャッチフレーズ）がある。世の中に広く知られた半ば自虐的な広告宣伝である。

……新しく開通（でき）た神戸ゆき急行電車
綺麗で早うて。ガラアキで眺めの素敵によい涼しい電車
（神戸終點に於て市電に連絡便利）……
とある。

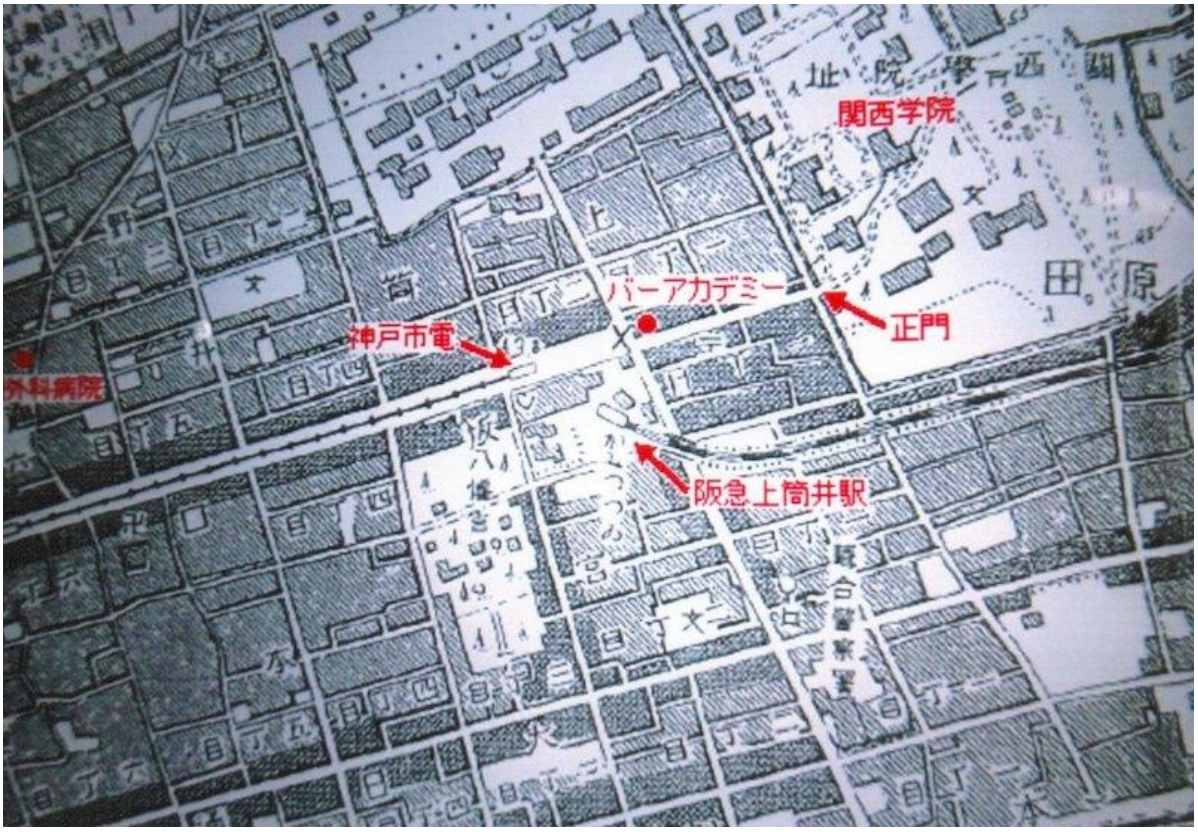


（写真⑤開通時のキャッチコピー　阪急文化財団提供）

既に営業を開始していた阪神本線や省線に対して逆にガラアキを強調したものである。
開通時は大阪梅田より神戸駅間を 50 分で結び、省線大阪・三ノ宮駅間 51 分、阪神の 60 分に対して優位を誇った。
（二宮注：神戸本線の神戸駅は後の上筒井駅であった。）

（写真⑥大正 9 年（1920 年）開通時の神戸（上筒井）駅　写真提供：阪急電鉄）

終点の神戸駅（上筒井駅）は現在の神戸市中央区坂口通 2 丁目 1 番地にあり、兵庫県福祉センターが現在ある。現在の神戸市営バス「上筒井 1 丁目」バス停の近所である。
また現在阪急電鉄「王子公園」駅より徒歩で 10 分位の場所にあった。
当時開業時には関西学院が西宮市上ケ原に移転する前であり、関西学院もすぐ近くであった。（関西学院上ケ原キャンパス移転は 1929 年）



（写真⑦開通当時の終点上筒井駅付近地図）

ちなみに写真⑦にあるバーアカデミーは当時より文化人の集まる有名なバーであったらしく、谷崎潤一郎もよく立ち寄ったバーである。
その後、昭和 11 年（1936 年）4 月 1 日には神戸市内の高架線が完成し梅田から神戸（現・神戸三宮）が開通し、西灘駅（現・王子公園）が開業した。
そして従来の神戸（上筒井）を上筒井駅に駅名改称して、西灘駅から上筒井駅を上筒井線としたが、上筒井線は昭和 15 年（1940 年）に廃止された。

（写真⑧昭和 11 年（1936 年）神戸高架乗入れで梅田～三宮が直通に　写真提供：阪急文化財団）

さて地元の岡本駅は大正 9 年（1920 年）7 月 16 日に開通と同時に設置され開業している。
本山村誌（昭和 28 年発行）には

……大正 9 年 7 月阪神急行電鉄株式会社が大阪梅田、神戸上筒井間 18.69 哩にわたる神戸線を開通するに及んで本村にも岡本駅が設置された。これが本村における最初の停留場である。従ってこの時以来本村は大阪及び神戸の両都市と連結するに至り、本村の変貌がにわかに始って来た。阪神急行電鉄株式会社は岡本駅を開設すると共に同社の経営する「北畑住宅地」を北畑に設けて沿線住宅化の糸口をつくった。本村に省線摂津本山駅が設置される昭和 10 年に至るまで、阪神国道の沿線を除いた大部分の地域の村民は東西への交通を専らこの阪急電車によったから、阪急電車の演じた役割は極めて大きいと言わねばならぬ。……（後略）
（本山村誌 420～421 頁・旧漢字は筆者二宮が新漢字に変換している）
とある。

（写真⑨昭和 11 年（1936 年）神戸線終点の神戸阪急ビル）

（写真⑩同時期の梅田阪急ビル）

先述したが、「北畑住宅地」などと共に小林一三は、沿線各地に於て宅地開発を沢山行っている。沿線開発を行うことで輸送需要の喚起を目指し、郊外開発の先駆者と言われている。
阪急電車（前身の阪神急行電鉄時代を含め）は開業前後に独自のパンフレットや冊子に自社沿線を宣伝し郊外生活を宣伝した。
阪急神戸線が開通した頃の 1920 年代から 1930 年代には「北畑住宅」「甲東園住宅」「石橋・仁川住宅」「甲風園住宅」「曽根・伊丹住宅」「塚口住宅」「雲雀丘・園田住宅」「武庫之荘住宅」などなど他にも沢山の【住宅地】開発をすすめている。

阪急神戸線が開通した大正 9 年（1920 年）の本山村人口表によると（本山村誌 297 頁）野寄 819 人、岡本 832 人、田中 367 人、田辺 422 人、北畑 380 人、小路 259 人、中野 480 人、森 661 人、計 **4,219** 人となっている。（原文のママ）
集計すると 4,220 人となるが、いずれにしても 4200 人前後の人口であった。
そんな沿線地に小林一三は沿線土地開発を行ったのであるが、彼の理想は“理想的な郊外生活”と“月給弐拾円で買える土地家屋”をキャッチフレーズとした経営地であった。

（写真⑪小林一三が展開した阪急沿線の経営地の一部）

小林一三は「郊外に居住し、日々市内に出で、終日の勤務に脳漿を絞り、疲労したる身体を其の家庭に慰安せらるる諸君」すなわち、中堅サラリーマンを対象とした上記の販売戦略をとっている。
大正 10 年（1921 年）つまり、阪急神戸線開通翌年には、阪急岡本駅周辺を含む 17,557 坪の土地の分譲が開始された。筆者二宮宅地も岳父が購入したこの分譲地である。（本山北町 6 丁目）
阪急住宅経営で注目されるのは、和風建築が多いことである。小林一三は持論として、日本人は「寝台的な設計より畳敷が愛されて、純洋式は不評である」と自叙伝でも述べている。

（写真⑫岡本住宅地の面影を残す本山北町 6 丁目の住宅）

これらの阪神間を中心とする地域に育まれた生活様式（住宅地・建物を含む）や文化・芸術（1900 年代～1930 年代）は**阪神間モダニズム**と称されるようになり独自の文化を醸成する基礎ともなっている。

我々の地元、岡本駅と阪急電車について、残された写真から、その昔をたどってみたい。
先づ写真⑬は 1935 年（昭和 10 年）頃の岡本駅の駅舎である。ちょうど省線（現・JR 西日本）の摂津本山駅が開設された頃の写真である。

写真⑬

次の写真⑭は多分第 2 次大戦後の 1950 年（昭和 25 年）頃の岡本駅近くを走行する阪急電車である。（写真は本山村誌による）

写真⑭

写真⑮は 1961 年（昭和 36 年）の阪急岡本駅である。特急電車が通過をしていく姿である。
当時は岡本駅には特急は停止していない。

写真⑮

また、岡本駅のすぐ東の踏切は昭和 42 年（1967 年）頃までは警手のいる有人の踏切であった。手旗を使用して踏切の上下線を安全確認していたことを記憶している。

（写真⑯有人であった踏切番のいた跡地：新梅林踏切道）

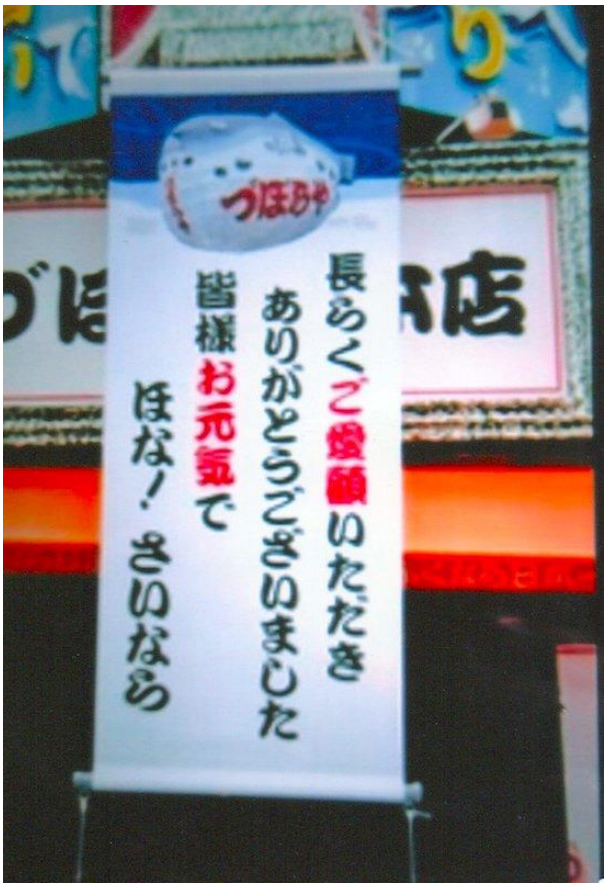
また写真⑰は阪神・淡路大震災の際に本線が不通になっていた間の 1995 年（平成 7 年）に夙川と岡本間を結んで運転された阪急電車である。はや 25 年もたってしまった。

写真⑰

我々に 100 年前から利便を与えてくれた阪急電車であるが、先人達の開通の努力に感謝したい。

（写真⑱開通 100 周年のヘッドマークをつけて走行する阪急電車）

話は余談となるが、阪急電車神戸線と同じ年に開店した大阪新世界の、いや大阪のシンボルのふぐ料理店「づぼらや」が、「ほな！さいなら」と今年閉店した。



（写真⑲「づぼらや」閉店のたれ幕）

100 年は我々の人生に比較して長いようで短い年月でもあろう。

令和 2 年 9 月 10 日・記
二宮健（旅行評論家・協議会監査役）

［入力・編集：FKV 武田］